

甲子園短大 木水禮子 ○藤井喜美

目的 下着に対する意識と着装形態の変化を知るため、女子中学生、高校生、短大生の制服着用下における下着着装の実態及び意識の調査を行った。

方法 甲子園学院中学生、高校生、短大生を対象とし、平成3年7月、10月、平成4年1月の3回、同対象者で調査を行った。調査は、調査当日制服の下に着用している下着について質問紙による自己記入法で実施した。

結果 着用している下着の種類は少なく、特にランジェリー類の着用はきわめて少なかった。ファンデーション類では、ブラジャーは中学1年時では30～50%の着用率であるが中学2年時から60%を越え、中学3年からはほぼ100%着用していた。ボディースーツの着用者は全くなく、ガードルも高校3年時位から着用者が増加するが、全体としては体をしめつけることをできるだけ排除したいという意志がうかがわれる。アンダーウェアでは、タンクトップの着用という現象がみられ、これは現代の若者の衣服全体の着装の仕方に関係があるように思われる。下着の色柄について白無地着用者が予想外に多かったが、パンティではほぼ70%の者が色柄ものを着用していた。組合せとしては予想通り簡略化がみられた。ブラジャーとパンティの基本型にガードルの組合せ、またタンクトップの組合せ、冬期には、Tシャツ、シャツの組合せとなり下半身下着のより省略化がみられた。パンティの型は、セミビキニ、ビキニ型がほぼ80%を占める結果であった。下着着用の目的については、下着本来のもつ目的が失われつつあり、年令が低いほど目的意識がはっきりせず、習慣的に着用している者が多かった。第1報では着装実態を主に報告する。